

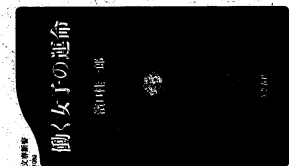
日本経済新聞

1月24日

日曜日

濱口 桂一郎著

働く女子の運命



「女性の活躍」がなかなか進まない。管理職に占める女性比率は1割ほどで、3と4割が中心の欧米とは大きな差がある。出産を機に離職する女性はなお多く、非正規の女性も増え続けている。

なぜこんなにも女性が働きにくいのか。根本の部分から解き明かそうという意欲的な一冊だ。

本書が切り込むのは、日本の雇用システムそのものだ。雇用保障と引き換えに「いつでもどこでもどんな仕事でも」になる。そんな無限定な働き方がいかに女性の壁になってきたかを詳細に描いてい

る。様々な資料をひもときながら、働く女性と日本型雇用の歴史を丁寧に解説しており、説得力がある。

とりわけ、男女雇用機会均等法の成立(1985年)前後のくだりは興味深い。「日本型雇用礼賛が最高潮に達した時期」だったゆえに、女性をつまき後押しできなかったことが浮き彫りになる。

難しくなりがちなテーマだが、文章は読みやすい。単に両立支援策を充実させるだけでは十分ではない。男性の働き方も変わる必要があることがよく分かる。

少子高齢化と人口減に直面する日本では、女性や若者らが力を発揮しやすくすることが欠かせない。日本の雇用はどうかあるべきか、考えを深める一助になるだろう。(文春新書・780円)

「日本型雇用」が活躍の壁に